森にあるもので 火をおこそう！

マッチもライターも必要なし！
自然にあるものだけで火をおこす技に挑戦だ！

教えてくれる人

福島・南会津町　大西琢也さん

自然学校「森の遊学舎」代表。火起師。「こめらの森・南会津」を拠点に、「火起こし道場」や「縄文人になろう！」と題した野性味あふれるワークショップやキャンプを各地で展開。TVチャンピオン「サバイバル野人王選手権」(2001年)優勝。

- 挑戦する人
- 左から
- 梨本陽太くん(10歳)
- 山下啓くん(9歳)
- 大西風慧ちゃん(3歳)
- 山下萌ちゃん(12歳)

自然学校「森の遊学舎」のホームページ　http://www.ugaku.com

まとめ・編集部、写真・依田賢吾

火おこしにつかうのは、この4つだけ

植物の素材から火が生まれる！

火きり板

板のふちに沿って、正三角形の切れ込みと浅い円のくぼみが彫ってある。板の素材は、杉などやわらかい木がいい(火きり板の詳しいつくりかたは、34ページ)。

火口

火種(火の赤ちゃん)をこの中に包んで、大きな炎にそだてるゆりかごの役目。麻縄や樹皮などをほぐして鳥の巣のようにまるめてつくる。

中心は空洞

先端の5cmはナイフで外皮だけをむく

のこぎりで平らに切る

火きり棒

太さ1cm、長さ60cmくらい。枝の中心が空洞で、できるだけまっすぐで硬い枝がいい。枯れた枝はもろいので、生の枝を切り、2週間くらい乾燥させてつかう。

枯れ葉

下からの湿気を防いだり、火種を火口まで運ぶお盆の役目をする。熱に耐えられるよう厚みのあるものがいい。おすすめはマテバシイやツバキの葉。薄い場合は2枚重ねる。生の葉は水分を含んでいるのでNG。

大西琢也さんは、火おこしの達人。細長い木の枝を杉板の上でクルクル回すと、みるみるうちに火が出始めて、火が誕生した。つかっているのは、ウツギの枝、杉板、マテバシイの葉、麻の繊維の全部で4つだけ。この方法は「きりもみ式」といって、はるか縄文時代から行なわれてきた、世界で一番原始的な火おこしの一つだ。

自然からもらった、特別な火

自然の素材から生まれてきた火は、マッチやライターで手軽につけた火と見た目は同じでも、「自然や神様が与えてくれた、特別な火」、そんな風に感じる。実際、神社の神事の際には、現在もこの「きりもみ式」で火がおこされている場合もあるそうだ。

慣れないうちは時間がかかって大変かもしれないけど、その分、火が生まれた瞬間の喜びもひとしお。ぜひ、この感動をきみにも体験してほしい！